かさおか

発行所
天理教笠岡大教会
かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)
電話 66−1311
FAX 66−1314

海松ヶ岡分教会

昭和46年、大教会の移転後、旧神殿の向きを変え、その後、附属建物を改築して現在に至る。

立教179年
11月号

秋季大祭講話

よふぼくとしての誇りを持って、後継者の育成を

世話人　島村廣義先生

去る10月21日、大教会秋季大祭にご参拝くだされた世話人・島村廣義先生は、神殿講話の中で、立教の元一日の出来事に話しを起こされ、縦の伝道に焦点を当てて、ひながたを辿ることの意義を強調された。

その上から、道の後継者育成の上には、教会長を始め、世界だすけのよふぼくとしての誇りを持って望む姿勢を促された。

以下に要旨を掲載する。

お話し下さる島村先生

◎立教の本旨――陽気ぐらし

秋の大祭は、立教の元一日を記念してつとめるおぢばの秋季大祭の理を戴いて、それぞれの教会でも「大祭」としてつとめています。

立教の元一日の様子を振り返ると、教典の冒頭に、

我は元の神・実の神である。この屋敷にいんねんあり。このたび、世界一れつをたすけるために天降った。みきを神のやしろに貰い受けたい。（典・第一章）

という、親神様が初めて私たちに仰せられた御言葉が記載されています。

この御言葉に親神様の思召すべてが込められ、お道が始まった理がすべて、ここに凝縮されています。

この御言葉が下がる一年前、秀司様が足を痛められ、修験者を呼んで寄加持するということが、前年の10月26日に起きました。

それからの一年間、たびたび足が痛くなり、そのたびに寄加持して、何とか一年間、切り抜けられますが、天保9年10月23日に至って、秀司様の足の痛みだけではなく、中山家当主の善兵衛様が眼を、奥様のみき様が腰を患われるということで、中山家の中心になるお三方が身上になられました。

一大事ということで、例によって寄加持するべく、加持台の方を呼びに行くと都合で来られないということで、教祖が加持台をつとめられ、身上平癒を願われることになりました。

そして、寄加持をなさる内、ただ今の御言葉が下がりました。

この御言葉が、人間創造の約束に基づいて、親神様がこの世にお現われになった御言葉です。

そもそも、親神様は、陽気ぐらしをするのを見て、ともに楽しみたいと思召されて人間を創られた。しかし、心の自由をお許しになったことが、親神様の御心に沿うて陽気ぐらしするべく通ればよかったのですが、欲の心遣い・我さえ良くばの心遣いが、積もり重なって、生れ更り出更りするたびに陽気ぐらしとは懸け離れた世の状になりました。

親神様は、人間をお創りになったときの約束の年限を待ちかねて、この世の表にお現われになり、「世界一れつをたすけるために天降った」と仰せになりました。――陽気ぐらしの世界を待ち望まれる親神様の切なる思い、そのために世界一れつをたすけあげ、そして、陽気ぐらしを共に楽しみたいとの切なる思いが籠っています。

教祖は人間を宿し込まれたときの母親の役をつとめられたいんねんある方（教祖魂のいんねん）で、「このたび」というのは「宿仕込みの子数の年限が経ったなら」という約束の年限（旬刻限の理）であり、「この屋敷」というのが、宿し込まれた元なるぢばがある地点（やしきのいんねん）、この3つが「立教の三いんねん」で、この御宣言によって、お道が始まった由縁（わけ）を明かされています。

◎善兵衛様の御決断

身上平癒を願っての寄加持だったのに、身上をたすけるという言葉は一切なく、「世界一れつをたすける」という目的のために「みきを神のやしろに貰い受けたい」という御言葉が下がりました。

その当時、中山家は、沢山の子どもたちも幼なく、これを聞き入れることができない大変なことでしたので、他所へお遷りいただきたい、とても神の

やしろに差し上げることはできませんとお断わりされました。

親神様にすれば、「人間宿し込みの元なるぢばで、教祖を台にお道を啓められる」意味は、親神様として、違えられない約束の年限に基づいて進められることでしたので、

「誰が来ても神は退かぬ。今は種々と心配するは無理でないけれど、二十年三十年経ったなれば、皆の者成程と思う日が来る程に。」

（伝・第一章）

と仰いました。

「不思議なおたすけをいただいて、その御恩報じに、たすけ一条の道の御用に通る」と決心しての私たちの初代、あるいは、この道を信仰する私たちなら、この親神様の思召が分かりますが、当時、初めてのこと、善兵衛様を始め中山家の人々・ご親族の方々のご心中は大変だったろうと想像します。

このときのことについて、諸井政一先生の認められた『正文遺韻』の中に「善兵衛様の御決斷」という項が書かれていますが、

今日は御道の爲に、身代のこらず使ひはたしても、助け一條に從事すると、決心なされた御方も、澤山な事でござりますが、皆、何れも、自身助けてもらひ、身代にもかへられん、生命をつないで貰ふた御恩を思ひ、又いくへの教理もきかしてもらつて、いんねんといふ事を知り、且つ助け一條で通れる事をみせてもらふて、そこで決心でけたのでござりませう。

なれど善兵衛様は、さういふわけではござりませぬ。助けて貰ふたといふ事もなし、身代皆なくしても、助け一條で通れるといふあてもなし、貧乏におちきつた上は、三千世界助けさすと仰有つても、貧乏におちきらぬうちであるから、まだ一人だも、助かつた處を見もしません。神様のおさとしとはいへ、吾女房の口からきく事である。何にも證據もなければ、たのしみもない。然るにたゞ、神様の御とき被下た眞理を聞きわけて、決して之は狐狸の話でもなければ、又女房が狂氣した魔力でもないといふ、御得心ができましたから、直に御決心被遊ましたのであります。（『正文遺韻抄』43頁）

という下りがあります。

「二十年三十年経ったなれば」の「三十年」というのは、ちょうど慶応3年に当たりますが、その頃、教祖は、たすけ一条へのおつとめの完成を目指してみかぐらうたの御制作に掛かられました。

そういうことは、30年経過して分かったことですが、当時の方々にすれば、大変な親神様の難題を突きつけられたということだったでしょうに、

一家の都合を捨てて、仰せのままに順う旨を対えた。（典・第一章）

とある通り、この善兵衛様の心定め・決心があって、お道が始まることになります。

◎それぞれの入信の元一日

教祖は、口や筆で親神様の御教えを説き明かされ、身をもってこれを示された道すがらこそ、私たち万人が通る手本・雛形であると教えられますが、この立教の元一日の出来事が、私たちの手本・雛形――教祖のひながたの始まりです。

善兵衛様が、天理教の信仰者の第一号だとも言えますが、私たちそれぞれの初代の入信の元一日に置き換えて、これを考えてみても、よく分かることです。

「この屋敷にいんねんあり。」とは、敢えて置き換えるなら、「それぞれの繋がっている名称の理」。「みきを神のやしろに貰い受けたい。」とは、「お前らも、よふぼくとしてたすけ一条の御用の上に使うぞ」と、そのために、神様は、それぞれにしるしを付けてお引き出しくださると受け止めると、それぞれの入信の元一日に、いろいろと思い当たるところがあります。

逸話篇に「定めた心」という増井りん先生のお話がありますが、

さあ〳〵いんねんの魂、神が用に使おうと思召す者は、どうしてなりと引き寄せるから、結構と思うて、これからどんな道もあるから、楽しんで通るよう。用に使わねばならんという道具は、痛めてでも引き寄せる。悩めてでも引き寄せねばならんのであるから、する事なす事違う。（逸・36）

と話されています。

それぞれがお道に引き寄せられたのは、親神様が「たすけ一条の御用に使う」と思召してのことです。

◎よふぼくとしての誇り

たすけ一条の御用にお使いいただく

よふぼくとして、その御用をつとめることを誇りに思い、それぞれが、しっかりと御恩報じを実行せねばと思います。

それを通られた初代の道があって、今日の私たちがあります。

『おふでさき』にも

一寸はなし神の心のせきこみハ
よふぼくよせるもよふばかりを　三・128
よふぼくも一寸の事でハないほどに
をふくよふきがほしい事から　三・130
この人をどふゆう事でまつならば
一れつわがこたすけたいから　十三・85

と仰る通り、よふぼくを使って、世の中を陽気ぐらしの世界に立て替えようとの神様の思召にお応えする心で通ることが大切です。

精神の理によって働かそう、精神一つの理によって、一人万人に向かう、神は心に乗りて働く、心さえしっかりすれば、神が自由自在に心に乗りて働く程に、

（明31・10・2）

と仰せられますが、よふぼくのつとめはたすけ一条にあります。

自ら、この御用の上に励み、親神様の思召を心に納めるとともに、身をもってこの教えを実行し、それを示しつつお話をお取り次ぎして、にをいがけ・おたすけに掛かる。どうでもこうでもたすかってもらいたいとの願いから真剣におさづけを取り次いで、おたすけに掛かる。――これが、私たちよふぼくの、親神様からお与えいただく立場であり、その御用です。

この立教の元一日に心を寄せ、それぞれの入信の元一日に心を新たにするとともに、親神様の思召にお応えする御恩報じの道を歩むことを心に定めてつとめたい。

◎将来を担う人材の育成

教祖130年祭をつとめ終え、将来を担う人材（陽気ぐらし世界建設のために立ち働くよふぼく）の育成に、全教挙げて取り組んでいます。

教祖130年祭の後の神殿講話で、真柱様は、農業に譬えて、その丹誠を促されました。

植物は、人と違ってものを言わないが、人間は、植物と違って心がある。単に育てられるだけの受け身ではない。その意味で、自らの意志で「思召に適うよふぼくに育とう」という気持ちになってもらえるように手助けし丹誠もすることが大切である。その上で、教祖のひながたに倣って、人材を育成するという上に心を遣ってもらいたいとのお話です。

◎人材育成のひながた

教祖は、秀司様とこかん様を台にして、いろいろと私たちに、人を育てる上での手本を示されていますが、このことについて、真柱様が、ある年の少年会年頭幹部会の席上で、次のように話されました。

秀司様やこかん様が教祖を頼りに暮らされた道中は、言わば、少年会の手本に相応しい。

天保9年、月日のやしろとなられてから、教祖は貧のどん底に落ち切られ、ぼつぼつと救けを乞う人々が現われてからも、毎日の暮らし向きは、たちまちにして結構になったのではなくて、暫くの間は、難儀不自由な時代が続いた。ただ不自由なだけではなく、周りからの状況も、教祖・家族の回りに厳しく加わってきたと想像できる。

教祖は、月日のやしろ、親神様の御心そのままだから、如何に難儀だろうが、万民の嘲笑が激しかろうが、いそいそと通られたことには違いはない。

一方、周囲の人たちは、時には、親を疑いたくなったこともあったろうし、愚痴の一つもこぼしたくなったこともあったろうと想像される。

教祖・秀司様・こかん様の3人で過された、そうした中の約10年間は、食べ物だけではなく、全てにおいて不自由な毎日が続いた。

ある日、飯降伊蔵さんが、何か用はないかとお屋敷を訪ねると、寒い夜にも関わらず、灯も灯されず、3人が寄り添っておられる姿に、大急ぎで柴を掻いて暖を取ろうとしたが、何処を探しても柴は無く、漸く、落葉を集めて暖を取ったという話がある。

そうした道中、

「どれ位つまらんとても、つまらんと言うな。乞食はさゝぬ。」

（伝・第三章）

と教祖が、子どもたちに諭されたとか、あるいは、また、

水を飲めば水の味がする。親神様が結構にお与え下されてある。

（伝・第三章）

と励まされながら、子どもたちを仕込まれたという話。逆に、子どもの側からこれを思案すれば、この2人は、教祖の御言葉を信じ、教祖の御言葉を頼りに、その御指示通りに、日々、青物

や柴を商い、時には、糸を紡ぎながら、恐らく、お話を聴いたこともあったろう。細々と難儀な道中の中にも、明るい光を見出しながら通られた面影が浮かばれる。

秀司様・こかん様は、天保9年には、それぞれ、18歳・2歳という年齢で、恐らく、秀司様にすれば、不自由でない暮らしをある程度、経験されたろうから、全く天地がひっくり返ったような生活の中に、どれだけ、厳しさを身に味わわれたことだろう。こかん様は、生れながらに難儀不自由な時代に育てられ、恐らく、周りの嘲笑や罵倒・反対・圧迫の中に、どのような気持ちで同じ年頃の子どもたちをご覧になったろう。ただ、教祖を頼りに、お互い助け合いながら、日々、生活された様が、窺われる。

後に、

よく伝え合い話してくれにやならん。（明31・7・14）

というおさしづがあるが、これは、難儀な道中を指しての御言葉のように思うが、それは、「今日の、こうした結構な日は、こういうところの台の上にある」というので、「御事跡を知らんとか、元一日を忘れぬよう」ということのみではなく、「親を中心に親の教えに順って暮らす者の、真実の道の暮らし方の根本」を教えられたような気がしてならない。

また、子どもの親として、「子どもに道を伝える心構え」を諭されたとも受け取れる。詰るところ、親を頼る子ども同士の道の手本、また、何が無くても、陽気尽くめになれ、陽気ぐらしは出来るということを教えられた、尊くも有難い、私たちにすれば、手本・雛形であると話されました。

教祖を信じて教祖に付き随われてお育ちになった秀司様・こかん様のことを台にして、話されていますが、私たち自身が、それぞれの教会生活、また、信仰生活の中にあって、こういう心で親を信じ、通っているか、また、子どもたちを育てる上で、教祖のような心遣いで、子どもたちに接しているのかどうかを反省しながら、教祖のひながたを学び、ひながたを慕うて通りたいものです。

◎入信の元一日を伝承する

去る全教一斉にをいがけデーのとき、私は、本部勤務者と一緒ににをいがけに出ました。

その道中、ある勤務者（教校を卒業した、信仰4・5代目の子）に、訪問先でお話を聞いてもらえるとしたら、どうお話しするかを訊くと、「何から話したらよいか？」と、訊き返されたので、入信の動機・元一日を知っているかと尋ねると、聞いていないと言う。

信仰4・5代目で、当然、聞いているものと思っていたので、意外でした。至急、親に訊くよう、お話ししました。

その訳は、逸話の中にも、数多く記されている通り、教祖からたすけられた方々が、どのようにお礼すればいいのかを教祖に伺うと、「自分のたすけられたことを人さんに話せ」・「人をたすけて回りなはれ」と、たすけられた御恩返しは、これが一番だと教えられています。

「自分の初代が、こういうならん中を、こうしてたすけられた。そのお礼に、代々、このお道を信仰しながら、その御恩報じの道として、にをいがけ・おたすけに回っている。」と、たすけられたことを台にして、「教えの台」と言われるかしもの・かりものの御教理から話したら、話しやすかろうと話しました。

まったくお道を知らない方ににをいがけ・おたすけすること＝布教ということは、もちろん大切ですが、お道を信仰している信仰者の家庭にあっても、入信の動機・元一日を聞かせてもらって、我家のいんねんを自覚し、心に納めるところから、成人の道が始まると思います。

我々の入信の元一日、そして、それをおたすけいただいて初代がある、また、代々のご先祖様がどのようにお道を通ってくださったればこその今日の私たちであるかということを、お互いに、しっかり、我が子に言って聴かせて、そして、その御恩報じの道を一緒に連れて通るということが、大切です。

家族、親から子、教会同士で、この元一日の話をお互いに言うて聴かせ、また、聴かせてもらうということが、この信仰を伝承していく根本です。

◎周囲の心遣いが成人の道を導く

10月9日の『天理時報』の中に、次のようなこどもおばがえりの感想文が載っていました。

鼓笛をしている少年会員、中学校では野球部に入っている。野球の練習試合の日と鼓笛の本番とが重なってしまったが、鼓笛の方は余り気が進まな

いこともあって、鼓笛を休みたいと父親に言いました。

父親は、「1年生で部活も休みにくいのは分かるが、おぢばがえりの鼓笛は、おまえにとって大切な神様へのご用だ。おまえが休むと、みんなにも迷惑かけるから鼓笛に参加するように」言いました。

嫌々ながら参加すると、口の回りにヘルペス、また、口内炎が重なり、ご飯も食べられない、水も飲めなくなり、ファイフも吹けなくなった。大変、しんどかったが、せっかく参加したので、その夜のおやさとパレードに出た。すると、歩いている間は朦朧とし、終った途端に倒れてしまった。

翌日もずっと寝たままになり、次の日のオンパレードに参加できるか心配していると、兄が、「僕も中学生の時、部活も休まないといけないから、おぢばがえりに参加するのが嫌だと思っていたら、急に盲腸で手術することになって、両方参加できなくなり、こどもおぢばがえり中、病院で寝てた。情けなかった。だから、お前も、嫌々ではなくて、喜んでするように心を決めろ」と諭して、おさづけしてくれた。

「こんなにしんどい思いをするなら、最初からもっと喜んで鼓笛に参加したらよかった。明日はがんばろうと決心し、ついに、本番。少ししんどかったが、喜んで行進すると、結果は、金賞。今は嬉しい。どんなに忙しいことがあっても、まず神様のご用を一番に、喜んでしようと思った。そんな大切なことを教えてくれた兄に感謝している」と、作文を書いていました。

父親の諭しもそうですが、兄が大きな役割を果たしています。自分の体験を弟に言って聴かせる姿も微笑ましいし、親から子へと信仰を繋ぐ実際の姿を、ここに垣間見るように思います。

一人の子どもが、親・兄弟・家族、皆の心遣いによって、共々に、順調に成人の道を歩んでいく一つの姿を、ここに見るような気がします。

道というは、小さい時から心写さにやならん。（明33・11・16）

と仰いますが、小さい子も信仰を心に納め、それなりの信仰を続ける道の信仰者です。

そういう上から言えば、先ずは、私たち育成者＝周りも、その心遣いで育てていくことが大切だと、ここで教えられたように思います。

家庭における縦の伝道の姿、素晴らしいお手本を、ここに見るような気がします。

◎意識して縦の伝道を

人材育成ということについて、道を先に歩む者が、後に続く者を教え導いていきますが、道を求めて歩く自分の姿を、後に続く者に実際に見せ、共々に連れて通るという姿勢が、一番、大切です。

親の信仰態度、これが根本です。特に15歳までは親の心通りの守護と仰せになりますが、

我が子で我が子の示し出けんのは、親の力の無いのや。（明30・12・11）

と仰るように、少年会員ならば、親の姿勢が、一番、大切で、それぞれが教祖のひながたを求めて、そして、求道の心で通ることが大切、その姿を見て、子どもたちが育っていきます。

ちょうど、縫い針が親であって、それに続く糸は子どもたち＝後に続く者という意味でもありましょう。

をやこでもふうくのなかもきよたいもみなめへくに心ちがうで　五・8

と仰せになるように、子ども一人ひとりを、一人の人格者として、信仰の喜びを伝えていく努力が大切です。

親の通っている姿を見て、子どもがそれを学び、真似をして付いてきます。

こうした、お道を通る人を育てる上での心遣いを、教祖のひながたに求めながら、親子共々、道を求めて歩きたい。

◎「道の後継者の集い」について

教祖130年祭後の活動として、「道の後継者の集い」が計画され、来年、25回に分けて実施されることになっています。

これは、20歳から40歳までの方々を対象に、広く、よふぼく・中席者・道の次代を担う方々を対象に、本部で開催される講習会です。

笠岡の理に繋がる皆さん方も、大勢、ご参加いただいて、おぢばで修養に励んでいただきたい。自らのいんねんを自覚するとともに、教祖の付けられたこの道を受け継いでいく道の後継者としての自覚をしっかり持ってもらって、これからの先行きをお通りいただけるよう導きたいとも思います。

◎教会長子弟の丹誠

また、来年から3年計画で、それぞ

れ直属で、教会長子弟の育成を進めることになっています。

教会長の子として、この世に生まれ育った若い者に対して、たすけ一条の使命の自覚を持ってもらうとともに、どのようにこの道を通ったらよいかを、お互いに、真剣に話し合う機会をお作りいただくことになっています。

立教150年の教義講習会というのがありましたが、その3次において、三代真柱様から次代を担う若者の丹誠ということについて次のように話されました。

ひとつ考えるべきは、若者の丹誠を如何にするか、次代を担う人たちを如何に育てるかということ。

殊に教会長の子としてこの世に生まれ育つ若者に対し、たすけ一条の使命の自覚に目覚めてもらうにはどうすればよいか、その根本を真剣に考え、取り掛からねばならないのは、今日の急務である。

根本から思案すると、私たちは、誰でも、いんねんあって、いんねんあるところへ生まれ出ている。それぞれの両親は、自分で選ぶことはできないし、両親も、また、自分の子を選ぶことはできない。どの人をどの家に与えるかは親神様のなさるお仕事で、親神様がお取り計らいになって結ばれた縁。親神様が、銘々の魂のいんねんを見定められて、その人に相応しい家庭へと生まれさせられる。

例えば、教会長の許（もと）に生まれた子どもは、全部、その教会長に生まれるいんねんの魂の者ばかりである。

親神様は、陽気ぐらしへのたすけ一条の御用に役立てようと生まれさせられた者であるから、よふぼく、道を通る者に育てよと、親神様からお預かりした子どもであると考える以上、子どもの一人ひとりを、最初からそのつもりで、親はもちろんのこと、子どもに関わる周囲の人々も協力して、いがみ・かがみのよふぼくにならぬように育てて掛からねば、親神様に申し訳が立たない。

また、子どもには、たすけ一条の御用に役立てるよう教え、常に自分の考え方や態度が、道の者に相応しくあるように、付いて教えねばならない。

自分は、いんねんあって教会長の子どもとして生まれ、そうして育ったという自覚を持ってもらわねば、困る。

そこから、すべての仕付けや思考が始まるものと考えたい。

そのためには、何としても、教会長が、自分に任せられた任務に、強い自信を持っていただきたい。

なるほど、教会長の仕事は、実に煩雑で煩わしくもあるだろうが、四方八方に枝を伸ばし、根を張らせることは意のままであり、その繁栄は、それぞれの心次第で戴けるという仕事は、世界広しと言えども、余り、類がない。

そう考えると、実に誇り高い仕事である、働き甲斐のある御用であると思っていただきたい。

教会長の皆さん。教会長として通らねばならんいんねんを持っておられるなら、勇んでその任に当たっていただきたい。

教会は、教会名称を同じくする人々のたすけ一条の道場であるから、運営や運用には、常に十分気を配っていただきたい。そうして、どの人も、どの人もたすけ一条の御用に役立つように育つ丹誠していただきたい。と話されています。

このおことばを戴いて、殆ど30年近くになりますが、今にして、教会長、お互いに心せねばならんことを諭されているように思います。

「お預かりする」我が自らの子どもを、教会に生まれ育ったそのいんねんを、しっかり自覚させるとともに、神様の御用に使うていただける道具として、お互いが丹精し、育てるべきです。

来年から、3年掛けて、それぞれの直属で、教会長子弟の育成プロジェクトを立ち上げ、それを丹精することになっています。

この方々が、今後の笠岡の道を背負っていく核になる方です。

また、よふぼくとしておつとめいただく方々の丹誠の上に、親心からおぢばで開かれる後継者講習会、そのおぢばの理を戴いて、お互いに、人を丹誠する上に、また、自らの成人の上に、心定めて歩みたい。

《以上要約》

剪定ひのきしん

管理部

管理部（武内清明部長）では、10月19・20の両日、秋の境内地剪定ひのきしんを管理部を中心に約20人で行った。19日は主に会長宅のサツキやツゲの丸いものの形を整え、青年会も月次祭の餅つきひのきしん後に片付けに参加した。

20日は部内教会長を含め午前中から大勢の人が寄り、2時からの直轄教会長の集いの予定を変更して、翌日の秋季大祭に世話人先生が御参拝下さる準備に、参道の落葉の清掃や会長宅剪定の片付けなどに清々しい汗を流した。

若人のつどい 開催

10・23 大教会にて

布教部

10月23日、大教会で「若人のつどい」（布教部主催）が開催され、18歳から40歳代までの男女48人が参加した。

開講式では、大教会長様が、自身の身上を通して感じた信仰の喜びなどについて話された。

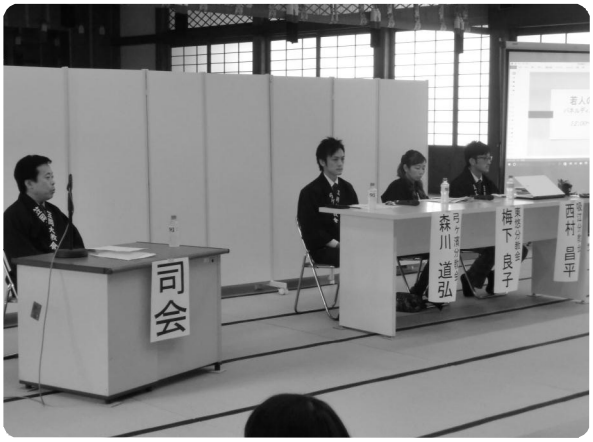
午前中の第1講は、後藤洋一先生（本部直属・愛布教所長、布教の家愛媛寮育成員）が、講話をされた。後藤先生は、30年間、単独布教する中で経験したおたすけ話や、態度や行いでお道の教えを伝えていく大切さについて話された。続いての質疑応答には、先生に多くの質問が寄せられた。参加者は、先生のエピソード一つ一つに熱心に聴き入り、時折涙を流す姿も見られた。

第2講は、パネルディスカッションが行われ、パネリストとして、梅下良子さん（東悠分教会）、森川道弘さん（弓ヶ濱分教会）、西村昌平さん（吸江分教会）の3人の働くよふぼくが登壇した。梅下さんは看護師、森川さんは雅楽家、西村さんは教師として、それぞれ教えに基づいた日々の取り組みを語った。

昼食は、婦人会手作りの豪華バイキングが振る舞われ、食事中の会話も弾んだ。

参加者は、このつどいを通して、日々の歩みの中で自分にできる、にをいがけ・おたすけについての意識を更に高めた。

講話いただく後藤洋一先生



それぞれの体験を語るパネリスト

豪華バイキングに賑わう

おかえり講話 開催

10・25 笠岡詰所

布教部

10月25日19時より笠岡詰所にて、おかえり講話が開催された。講師は、東本部属・道竹分教会長平野恭助氏。布教の家岡山寮副寮長、天理教岡山国際救援委員会代表、AMDA（世界32の国と地域に多国籍医師団を結成し、災害や紛争発生時、医療・保健衛生分野を中心に緊急人道支援活動を展開）調整員等を歴任。氏は教会長後継者時代、単独布教により部内教会を設立。また、94年AMDAルワンダ難民緊急救援に調整員として参加。さらに、20年にわたり仏教国タイにて海外布教に取り組

お帰り講話に登壇される平野恭助先生

み、これまでに30名のタイ人をよふぼくに導くなど、国内外、教内外にて幅広い活動に従事。

当日の講話開始30分前に日ハム対広島の日本シリーズ第一戦が始まり、各階に設置されたテレビの画面には大勢が釘付けとなっていた。しかし講話が始まる直前には、大半が会場の３階講堂に移動して、講師の話に真剣に耳を傾けていた。

平野氏の講話は、私たちの身近にある信仰的問いにヒントを与えるものであった。その内容は大きく四つに分けられる。最初に語られたのは、信仰の基本である「信心」についてである。氏は単独布教の実話を例にとりながら、「自分は本当に親神様を信じているのか」という自らの信仰心への疑念に、正面から向き合うことの必要性に迫った。次に、信仰者の信仰姿勢とそれに対する親神様の御守護について。「これだけ一生懸命尽くし運び勤めているのに、なぜ御守護頂けないのか」といった問いに、自身の心の中に描く執着から離れることが、その手助けとなると示した。更には、自教会でのバス団参の取り組みに触れ、バス経費の損得に左右される人間思案を離れ、親神様の御心に近づくべく大きな一歩を踏み出す心定めが肝要であると述べた。その結果、大勢の帰参者を御守護頂いたとも。最後に、タイ布教について。氏は現地で知り合ったタイ人青年の父親のおたすけを通じて、結果として父親は出直してしまったものの、そこから道の拡がりを見せていると紹介した。また、「道がのうてはでるにでられん」と、世界だすけをお望み下さる親神様は海外に道を付けることを思し召されていると感じる、と述べ、参集した私たちに海外布教を勧めて締めくくった。

（布教部副部長　佐藤真孝）

熱心に聞き入る帰参者

青年会総会 開催

10・27 本部中庭

青年会

10月27日、本部中庭で「第92回天理教青年会総会」が開催され、各地から約1万1千人が参集。笠岡分会からも委員をはじめ、おやさと管内勤務者・学生などの会員が参加した。

青年会では、2年後の創立100周年に向けて「心を動かせ 世界を拓け」をスローガンに活動を進めていく事となっており、今回の総会はその歩みだしの日となった。

中山大亮青年会長様は、告辞の中で自らが実践している親孝行についてお話しされ、また胸から胸へのにをいがけを実践していきましょうと促された。続いて真柱様より「道の後継者であるという自覚を持って立派に育ってもらいたい」とお言葉があった。

総会後は、詰所にて笠岡分会の会食を行い、100周年の歩みに加えて、12月4日の笠岡分会総会に向けての意気を高めた。

総会に参加した青年会員達

広島平和公園での外国語パンフレットにをいがけ

海外部

寒さを感じる時候の中、暖かい日差しの御守護を頂き、海外部主催、外国人へのにをいがけ活動が、11月7日、広島平和公園で行われました。

今回は部員以外に笠岡英語クラブ（毎月22日レッスン）のメンバーと高屋分教会のにをいがけメンバーを合わせて、総勢13人が参加してくれました。

大教会と高屋分教会からそれぞれの車で広島に向かい、到着後、平和公園内でおぢばに向かい世界平和を祈り、よろづよ八首を踊らせて頂きました。

その後、いくつかのグループに分かれて約1時間に渡り、外国語パンフレットを42部配布することが出来ました。何よりも嬉しかった事は、この活動を通して初めて外国人に平和公園でおさづけも取り次がせて頂くことが出来たことです。

今回は英語クラブでの勉強の力試しもすることが出来、人数も多かったので大変心強く、外国人旅行者や日本人にお話をさせて頂いたり断られたりしても、後に繋がる大変意義深い時間を過ごすことが出来ました。

（海外部長　上原志郎）

おぢばに向って世界平和を祈る

◆参加者所感

海外部は11月7日、広島平和公園にて海外の方々対象ににをいがけをさせて頂きました。高屋から6人、大教会から7人、計13人で例年より多い数となりました。

到着して、まず初めに全員でおぢばの方を向いてよろづよ八首をしました。その後、2・3人のグループを作ってにをいがけに回り、今回はアイルランド・オーストラリア・イスラエル・ベルギー・オランダ・ドイツ・ポーランド・タイ・イタリア・イギリス・スペイン・アメリカ・カナダ・スイスの方々にお声をかけさせて頂きました。

私自身は英語が全く話せませんが、大教会の海外部主催の英語クラブで勉強した布教英語のプリントを見ながら何とか話して、2枚のパンフレットを手渡すことが出来ました。数は少なかったですが、これで何かしらの縁が繋がればいいなと思いました。

日頃、海外の方とは話す機会がないので、今回このような特別な経験が出来て良かったです。

（大教会青年　上原孝）

「ひろしまリバークルーズ」元安川桟橋に向って

こころの詩

笠岡の教友が選ばれ掲載されていましたので転載いたします。（敬称略）

▼『天理時報』

▽11月6日付「時報歌壇」

・海松ヶ岡分　藤井光子さん

おめでとう　二十五年の時を経て

広島カープ優勝決める

・福満分　福島悦子さん

亡き姉の長袖ブラウス着た朝に

ほのかに匂う庭の木犀（もくせい）

▼『陽気』誌11月号「道柳」より転載。

▽佳　詠

・芦品分　金谷眞佐代さん

一日に必らず歩くポスティング

▼表紙写真　（海松ヶ岡分教会提供）

談話室

クール・ジャパン

稲富土分教会　須毛田英尋

人類は火を使い始め進歩してきたという。また進歩こそ人類の進む道とされて来ただけに燃える火の心が善しとされて来た。競争に勝つ事。戦争は生存競争の最も憂うべき姿。20世紀に核兵器の出現により初めて大戦争は終結し、それ以降食い止められている。

しかし、一見平和世界を構築しても火の心は衰えるどころか経済のグローバル化で増幅している。その生存競争熱がこの星を暑くし、その影響に人間は苦しんでいる。今年の夏の暑さはもう限界だ。

おふでさき第六号に、しんじつ神がこらほど思うて初めたこの世界を思わず暮らす人々の行く末を案じ、やまぐえ・じしん・おおかぜとも、てんび火のあめ・うみはつなみやと警告なされ、その通りになった。人は神の手、神と同様まことの心で生きていかねばならない。

しんじつの心とは如何なる心ぞや。それは火に対し水の心である。水には深い心がある事が悟れる。つくし・はこび・たんのうが水の心。

水は己をよごし相手をきれいにする自己犠牲で争いの心ではない。木が成長するため水が土中の栄養分を己に溶かし枝葉に運ぶ。切り倒され製材にかけられると乾燥のためその場から立ち去らないといけず、コンクリートとは砂・砂利・セメントに水を混ぜ、硬化の段になるとその場から去らねばならない。やる事をやったら、いさぎよくその場から立ち去り姿を消す陰徳の心、つくし・はこび・たんのうの心。美味しいラーメンを食べてもラーメンはほめられるが、水を直接ほめる人はいない。トイレも水のお蔭で用が足せるのに水に御礼をいう人もいない。いくら役に立ってもほめてもらえずひたすらたんのうと陰徳と水の心。

また水は相手に合わす。方円の器に収まり、形のみならず姿を気体にもなり固体にもなる。臨機応変で柔軟な心で頑固な心でない。アルキメデスが浮力を発見した。水は物を浮かす力があると。船が船である由縁が水に浮くから。大きな水ほど大きな物を浮かす事ができる。人の心も大きければ大きい程人を持ち上げる事ができる。水は下につくという。下に落ちるほど澄んでくる。心済ますには人の下に下に心を落とそう。その澄んだ心を神が使える。

水は物を溶かす力もある。水温が高くする程、物が多く溶ける。油よごれは水では落ちないが、お湯だと落ちるのがその理由だ。よって心が暖かい人に人は近づき、人助けにも繋がる。

水は平衡に保とうとする。この世はバランスで成り立つ様になっている。神とバランスにこだわる。身上、事情に見せられるのも、これでバランスをとってくださっているとたんのうする事だ。不都合な事や損害を被ってもたんのう。決して争わない。相手を責めない。等々、水は全て争わない冷静で清々しくかっこよく、それでいてものすごい目に見えない所に大きな力を持っている。

水と神とは同じ事。日本が世界に先がけ水のこのクールな心を発進すべきではないだろうか。これで地球温暖化が解消される。

・原・稿・募・集・

内　容　①小随筆　②教会・布教所の独自の活動の紹介　③俳句・和歌・川柳　④教会行事開催後の報告記事 等々

字　数　１０００字前後（８００字～１２００字）題名・所属教会名・氏名を明記して下さい。俳句等は一句からでも結構です。

寄稿先　下記、大教会内『かさおか』編集掛宛ドシドシご寄稿下さい。

郵　便：〒714-0066 岡山県笠岡市用之江３７７
ＦＡＸ：０８６５－６６－１３１４
メール：**tenkasa@yahoo.co.jp**
尚、原稿はお返し致しませんので、予めご了承下さい。

秋季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます
親神天理王命の御前に　会長上原理一　慎んで申し上げます
親神様には人間が陽気ぐらしをするのを見て共に楽しみたいとの思召から　道具を寄せ人間世界を創造下されお育て下さったばかりでなく　今尚陽気ぐらしが出来るようにとご守護下さっております　加えて天保九年十月二十六日教祖を月日の社としてこの世の表にお現れになり　不思議なたすけを通して陽気ぐらし建設の用木を寄せ　万一切の真実を明かして陽気ぐらしへとお導き下さっております事は誠に有難く勿体ない極みでございます　私共は真実の親心に触れ世界だすけを我が心として朝夕に御礼申し上げつつ　日々はお教え頂いたたすけの道具立てたる「つとめとさづけ」で以てたすけ一条に努め励ませて頂いております
その中にも今日の吉日は　この月二十六日におぢばでつとめられる秋の大祭の理を戴いて　此の名称でつとめる秋の大祭の日柄でございますので　おつとめ奉仕人一同　立教の元一日に込められた親心に思いを馳せ　明るく陽気に勇んで　坐りづとめてをどりをつとめさせて頂きます　御前には今日の日を楽しみに寄り集いました道の子供達が　日頃の御高恩に改めて御礼申し上げ変わらぬたすけ一条の親心にお縋りする皆の真実の状を御覧下さいまして　親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます
さて　親神様の心配をよそに人々は今を精一杯に生きていますが　後々のことを考えると心許ないように思います　今月大祭月に当たり直轄教会に大祭参拝をさせて頂き　立教の元一日に当たっての「世界一列を助けるため」との親の思いを再確認させて頂き　我が身我が家だけではなく世界の今とこれからをより良くする為に　私たち用木一人ひとりが御恩報じの心でたすけ一条の歩みを進めていくことを誓い合わせて頂き　来たる十一月二十三日の笠岡おぢばがえり目指して　初めておぢばがえりをする人を一人でも多く連れ帰ることを申し合わせて頂きました
又本日は世話人島村廣義先生にお越し頂き時旬に当たってのおぢばの思いを聞かせて頂きます　お聞かせ頂く一つ一つをしっかり心に治めて親神様教祖にお喜び頂けるよう精一杯にたすけ一条の上に邁進させて頂く所存でございます
何卒親神様には　教祖年祭の年の仕上げの旬に当たり　尚一層の勇み心を持って親孝心一筋に歩む皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして　万たすけの上に自由のご守護を賜り　一列兄弟の理に目覚め助け合いをする人が弥増して　お望み下さる陽気ぐらしの世が一日も早く実現しますようお導きの程を　一同と共に慎んでお願い申し上げます

大教会だより

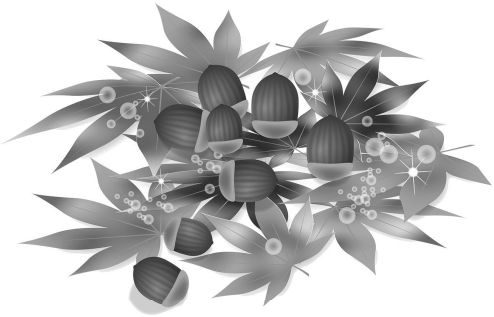
＝教会指令＝

◎任命願

輝美濃　分教会
＊前任　谷内伸自
＊新任　谷内秀自

谷内秀自氏

☆奉告祭　立教179年12月4日
立教179年10月26日承認



立教百七十九年 秋季大祭 祭典役割表

祭主	大教会長様
扈者	中村剛
	門脇元教

講話	島村廣義先生

賛者	上原浩
	吉岡誠一郎
指図方	上原繁道

十二月講話	佐藤道孝

役割＼区分	坐り勤	前半	後半
地方	佐藤道孝	吉岡壽	中村邦義
	山野弘実	三島渉	中村道徳
	中村義太郎	森本忠善	内海史郎
おつとめてをどり	大教会長様	中村剛	門脇元教
	岡本久善	中島誠治	杉原博之
	上原繁道	今川昌彦	上原浩
	大教会奥様	上原順子	武内正美
	田中ますみ	岡﨑豊子	門脇加津
	門脇郁子	谷内美知子	中村初美
笛	吉岡誠一郎	武内清明	淺野明教
ちゃんぽん	田中隆之	山田敏教	佐藤真孝
拍子木	谷内伸自	高木昭祥	上原繁次
太鼓	森本忠平	横山逸郎	渡邉隆夫
すりがね	笹尾正治	岡﨑真一	田林久嗣
小鼓	上原志郎	赤木素志	虫明立生
琴	虫明好美	内海安子	三島照美
三味線	今川佐智子	笹尾一美	横山小智榮
胡弓	佐藤香苗	森本冨美子	高木孝子

◎教人資格講習会修了者
立教179年11月10日終講
木津和　丸山隼人
後期　髙屋秀平　元一

◎教会長資格検定講習会修了者
立教179年11月19日終講
久松　中村剛史

訃報

佐藤久枝姉
呉福分教会長
10月24日出直されました。
享年　77才

中村雅子姉
照陽分教会前会長夫人
10月31日出直されました。
享年　93才

教会は山、畑、田んぼに囲まれている。数年前から畑の野菜の葉が鹿に食べられ始めた。近所はすでに猛獣除けネットで囲われており当教会も囲うことに。しかし、ビニールネットは破られ、さつま芋の葉はきれいに食べられ別世界となった。こうして鹿との戦いが始まった。秋は栗の収穫、鹿との取り合い、毎年の恒例行事に。三年前からはグウタラ農法と呼ばれる土を自然に戻す無農薬、無肥料に変更。徐々にミミズが増え始め喜んでいた矢先、なんと不思議な穴がポツポツと現われ始めた。犯人は何者なのか？ 今年の春、田の水路でアナグマに遭遇。ビニールネットを調べると丸い小さな穴が下のほうに開いていた。ミミズを食べに畑に侵入したのはアナグマ。何度も侵入されステンレスネットを張り、ようやく落ち着く。が次なる被害が…。トマトやとうもろこしが出来はじめた頃カラスに襲われ、とうもろこしはほぼ全滅状態。豆類は小鳥に提供。地球にとって人間は新参者であり自然の調整役のはずが、人間である私たちは地球を破壊し続けてきた結果であろうか。動物との共存共栄、互い、立て合い、助け合いはできないものなのだろうか…

（む）

新所在地：広島県福山市引野町三丁目三百八十一番地一
鎮座祭：昭和五十五年十月四日
奉告祭：昭和五十五年十月五日

3・27　第二十二回春季英語講習会開催（三〇日まで　七〇人参加）
4・1　鼓笛講習会開催（四日まで　二九八人参加）
4・27　布教要員研修会（四三人参加）
5　立教百四十二年上半期布教実修会始まる
5・21　月次祭後　久保初恵先生を迎え縦の伝道講習会（三〇〇人）
6・2　広岡文太郎、長坂実子両先生を迎え少年会育成講習会（六〇人）
6・22　婦人会長様　増田喜久子・山田登志子両先生を迎え婦人会笠岡支部第十二回総会開催（九〇〇人参加）
6・24　第八十三母屋笠岡詰所第一期工事終了し真柱様御入込

第八十三母屋（笠岡大教会信者詰所）第一期工事竣工式におけるお話

この度、第八十三母屋第一期工事が、めでたく竣工になりまして、本日は、お招きを頂いて寄せて頂いたわけであります。まず竣工に当たって心からお祝いを申しますとともに、この建物の竣工を目ざして、種々お骨折りをなさったでありましょう皆さん方の御苦労に、おねぎらいを申し上げます。ただ今は、大教会長様より、御丁重な御挨拶を頂きましたが、むしろ正直な気持ちを申すならば、お礼を申したいのは私の方で、皆さん方のお骨折りで、親里にこうして一つの母屋と呼ぶ建物が新しく増えたということについては、心から嬉しく思っているもの

でございます。それだけに、皆さん方のお骨折りに対して、厚くお礼を申し、おねぎらいを申したいと思う次第であります。まことに御苦労様でございました。大変、ありがとうございました。

引き続いて、第二期工事に入るということでありますが、北棟と呼ぶこの建物と、これから新しくかかっていく建物を、併せて笠岡の詰所としてお使い頂きたいと思うのであります。

そこで、母屋と呼び、あるいはまた詰所と呼びましても、建物の持つ意義をいかに弁え、これをいかに使いこなすかどうかということによって、折角建て上げた建物が、有意義にもなれば、あるいは無意味に終わってしまうことになると思いますので、この機会に、私の、この建物に期待する思いの一つを取りまとめてお話し申して、本日の御挨拶にいたしたいと、このように考えるわけであります。

御承知のように、詰所と呼びましても母屋と呼びましても、なるほど、呼び名は違いますが、その建物は、おぢばへ帰って来た人が、出入りする建物なのであります。したがって、おぢばへ帰って来る人がないならば、建物の意味はないのであります。また、おぢばへ帰って来る人の数が、多ければ多いほど、大きな建物を必要とするのであります。少なかったならば、小さな建物で、事足りるのであります。

この度、皆さん方のお骨折りによって、この建物を建てたということは、先程から聞けば、一千人の人が寝泊まりできるように計画した、という話でありますので、その建物を有意義に使用するためには、やはり帰参者が多いということが求められるわけであります。そこで、私は、皆さん方がおぢばへ帰って来られるその事自体が、果たして、私たちの信仰生活の上で、